

## 2010 年度「平和の経済学」 レポートを読んで

非常勤講師 伊藤恵子

### はじめに

数年ぶりの大雪に見舞われ、長らく深い雪に閉ざされていた鈴鹿山中にも、ようやく青空のもと明るい陽光が戻ってきました。

5 回にわたる講義のまとめとして、みなさんが『菜園家族宣言』を読んだ上で、1 月初旬に提出したレポート、読ませていただきました。

拙い講義、そして、年末・年始をはさんでの時期のレポート課題ではありましたが、みなさん丁寧に読み込んで、考察されたことが伝わってきました。

特に 4 回生以上の受講生は、「長く辛かった就職活動」、それぞれのゼミや講義で学んだこと、ボランティアなど地域での活動等々、さまざまな体験を重ねた上で、自分自身の問題として捉え、考察を深めた内容になっていることが印象的でした。

意外に地方出身の人も多く、中にはふるさとの農業や流域地域の実態から詳しく述べ、その上で論を展開している人もいて、なかなか感慨深いものでした。

感想カードやレポートを通じてみなさんの率直な思いに触れることができ、たいへん勉強になりました。ありがとうございました。

レポート（約 250 名分）は、さまざまな角度からの意見や疑問点などが書かれていますが、残念ながらここで全部を採り上げることはできないので、多くの人に共通する論点や、強く印象に残ったものなどを中心に、若干述べたいと思います。

### 簡単な講評

ますます厳しさを増していく今日の経済状況を反映してか、このままではどうにもならないのではないかという切迫感など、一年前とは違った大きな意識の変化を感じ取りました。「マネー資本主義」の暴走、世界経済の行き詰まりといった事態が、誰の目にも明らかになってきた今、多くの受講生のみなさんが、どんな方法かは別にしても、野放しの市場経済の弊害を何らかの形で是正しなければならないのではないか、という点では意見はおおむね共通しているようでした。

そうした中でも、この『宣言』の主旨に反対意見の人だけでなく、ある程度納得、あるいは賛同する人でも、「グローバル化の時代、この『宣言』にあるような構想は、きわめてドメスティックな政策に見える。もちろん実現すれば理想かもしれないが、現実の国際関係の中では不可能なのではないか」、「このような方針を採れば、日本の国際競争力は低下し、先進諸国や新興諸国から取り残されてしまうのではないか」、といった危惧を多かれ少なかれ抱いているようでした。

この疑問に直接答えることになるかは分かりませんが、こうした問題を考える時、韓国からの留学生と思われる受講生のレポートが、重要な視点を与えてくれるように思います。FTAを国家戦略に位置づけ、グローバル市場競争への対応では日本の先を行くとされる韓国ですが、この留学生は、母国でも現代の日本社会が抱える問題と類似した問題で、社会全体が苦しんでいることについて述べていました。

「それは、韓国が、特に朝鮮戦争以後、日本社会をロールモデルとして急速な経済発展を遂げたためであり、その速度があまりにも急激であったがゆえに、むしろ日本よりさらに社会問題は深刻である。日本と類似の社会構造を持ち、日本より激しい競争社会の成果主義のもと、過重な労働時間やうつ病に苦しむ人が増加し、世界1位の自殺大国（2009年）にさえなっている。こうした母国の現状に、一人の韓国人として悲しみを感ずる」と綴られていました。

韓国は、日本にも増して、経済成長の過程で、農業・農村を切り捨てて今日に至った歴史があり、さらに昨今は、より徹底した輸出工業への特化による貿易自由化路線に踏み切りました。しかし、今、日本の多くのマスメディアは、韓国が官民一体でグローバル市場に挑んで経済成長を遂げ、成功している一面のみを強調し、日本は韓国に後れをとってはならないとばかりに報道しています。このレポートを読み、そのような日本での報道が、韓国社会の実態からあまりにもかけ離れていることに気づかされるのです。

こうした例をとって見ても、グローバルな市場競争に勝ち抜いたとしても、決して大部分の働く人の幸せにつながるわけではなく、その過程でさらに過酷な状況に陥っていくと見るべきではないでしょうか。

今日のグローバル自由貿易体制は、自給度の高い国民経済を前提に、それを互恵的な商品の取引によって補完する本来の貿易の姿とは、もはやかけ離れたものになっていると言えるのではないのでしょうか。

経済学者の宇沢弘文先生も指摘されているように、各国は、それぞれの自然的、歴史的、社会的、文化的諸条件を十分に考慮し、社会的安定性と持続的な経済のあり方をもとめて、自らの政策判断に基づき、関税体系を決めるべきなのです。

さらに、現代は金融の力が肥大化しています。利潤をもとめて瞬時にうごめく投機マネー。誘発される原油や食料価格の高騰。策動する「虚」の世界が、人々の暮らしやいのちという「実」の世界を脅かし、攪乱する。ますます「虚」の世界が拡大し、「実」の世界を凌駕していく実に奇妙な現実。

こうした状況への不満から、今、世界の各地で激しい地殻変動を思わせるような事態が次々と起きています。実際、この1、2ヵ月の世界情勢を見ても、チュニジア、エジプト、リビアなど中東産油国で、民衆の蜂起が起こり、その影響は、さらに周辺諸国に拡大していくとされています。こうした世界の構造的矛盾がいよいよ深まる中で、私たち一人ひとりの意識も大きく変わっていかざるを得ないのではないのでしょうか。

藤岡先生の講義で学ばれたことと思いますが、為替取引への課税やデリバティブへの課税の導入などによって、投機的金融活動を抑制する国際的な取り組みが、いよいよ重要に

なってくるにちがいはありません。

こうした世界の現実が若い人たちにも色濃く反映しているのか、国際的な協調体制の必要性を前向きに説く受講生が少なからずいたことも、興味深いところです。たとえば、

「この『菜園家族』構想は、一国だけで踏み切るとは難しく、おそらくE UやA S E A N等、複数の国々が合わさって共同で取り組みつつ、世界に発信していくことになるのではないかと。ただし、C O P同様、様々な国の利害が絡み、長期化、難航が予想される。いずれにせよ、壮大な社会変革は、今日明日にできるものではなく、長いスパンを経て実現へと至るものである。変革は強権的に上からなされるものではなく、人々の内面から滲み出るものでなければならない。そうなるためには、多くの人々に新しい社会構想の必要性をいかに浸透させるかが、不可欠になってくる。人々が長い歴史の中で社会をつくる主体の一人として自己を認識するに至った時、この壮大で難解な課題に取り組むことが可能になるのではないだろうか」といった主旨の積極的な意見がありました。

他方、国内の施策についても、前向きに考えている人が何人もいました。たとえば、

「資本主義の確立から200年余が経った今日においては、人々が資本主義に慣らされていて、全く異なる新しい体制へ移行することへの不安感を拭い去ることは容易ではない。この構想をめざすにしても、急激な大改革ではなく、中期的な目標設定をすべきであり、たとえばワークシェアリングをとっても、そうした考え方自体の周知徹底と、政府主導による試験的導入として週休3日からはじめるなど、過渡的措置としての政策立案が大切なのではないかと。段階を踏むことが、結果として、この構想の達成につながるのではないかと」という主旨の指摘です。

こうした数々の文章から、自分たちの未来を、自分たちのものとして、真剣に考えようとする姿勢が、ひしひしと伝わってきました。これからの時代を担う若い人たちから、このような具体的な意見が出てきたことに、意を強くしている次第です。

## まとめにかえて

特に今年は、日本では、政府が6月を目途にT P P交渉参加の是非に結論を出すとし、その前提として農業改革基本方針も決定するとしているなど、くにかたちを土台から揺るがしかねない重大な岐路に立たされています。しかし、農業問題のみならず、金融・医療・労働・・・など、その影響が多岐におよぶとされるT P Pについて、多面的で正確な情報が国民にはほとんど伝えられていないのが現実です。議論抜きに知らぬ間に進められていくことに、大きな危惧を感じています。

『菜園家族宣言』の「はじめに」でも指摘したように、未来社会のあるべき姿を探ることは、人間にとって根源的な欲求であり、ごく一部の「学者」や為政者に限られた議論ではなく、地域に生き、地域に暮らすすべての人たちに等しく開かれている営為でなければなりません。

これを機会に、単にこの『宣言』に書かれている構想に「賛成」か「反対」か、あるいは

は「実現可能」か「不可能」かの単純な議論に終わることなく、在生も社会に出る人も、みなさんそれぞれの立場から、身近な生活や社会の現実に学びつつ、落ち着いた時にでも、この構想をもう一度多面的にじっくり検証してみることも、よい勉強になるのではないかと思います。「平和の経済学」と未来社会のあり方についてさらに勉強を深めていく、ひとつのきっかけになればと願っています。それは、自分自身の「経済学」を根源的に問い直しながら、再構築していくことにつながるのではないのでしょうか。

ところで、つい先日、新しい月を迎えた3月1日、この奥山の研究庵に通のはがきが届きました。山のふもとに広がる犬上川・芹川流域地域の中核都市、琵琶湖畔の城下町・彦根の、昔ながらの商店街の一隅に佇む日本料理の家族経営の店で、板前さんとしてご両親とともに頑張っておられる方からの季節の便りです。実直な職人氣質の働き者で、文化・芸術や社会の諸般にも関心が深く、なかなかの勉強家で、10年ほど前に、「菜園家族」構想の原形となった小冊子『菜園家族酔夢譚』を読んで下さいました。

忙しい日々の仕事や暮らしの中で、直接的には学生と深い関わりがあるはずがないのに、はがきに印刷された文面からは、心の奥深いところで若い人たちとしっかり繋がっておられることが、滲み出ていました。同時代を地域で懸命に働き生きておられる方から、学生のみなさんへむけられた言葉のような気がして、そのはがきからここに転載させていただき、締めくくりに代えたいと思います。

#### 美しい100

正の10を10個集めると100になる。

負の10同士を掛けても100になる。

「答えは同じでも、正を積み重ねた100は陰翳がない」(歌人 塚本邦雄)

悔いの種をまき散らして人は生きていく。誰しものが悔恨あつての、負数あつての人生です。未曾有の就職氷河期、新しいスタートを切る若者と共に、自戒を込めて噛み締める言葉です。

心の傷から血の噴き出す経験をした人だけが、負の陰翳を身に刻んだ100となる。美しい100である。

(はがきより抜粋)

この山里では、根雪の下から現れた土に、春一番の福寿草の花が、今年もまた、咲きはじめました。

結果の「負」を怖れることなく、頑張ってください。

2011年3月5日(土)

里山研究庵Nomadにて

〒522-0321 滋賀県犬上郡多賀町大君ヶ畑 452 番地

<http://www.satoken-nomad.com/>